慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	隅谷三喜男著 日本労働運動史
Sub Title	
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.7 (1966. 7) ,p.800(136)- 802(138)
JaLC DOI	10.14991/001.19660701-0136
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660701-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

も分析を加えようとしている。

したがって、本書の構成は、本論においては、概説と各国別研究（アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツ、ソビエトの五ヵ国の経済援助）よりなるが、そのどれもが、若干の例外はあるが、一、援助の理念と目的ないし歴史的背景、二、援助の実施状況、三、援助効果、四、援助の拡大の可能性と方向、の四節に分かれ、きちんと体系的に究明が行なわれている。そして考察対象期間は、一九五〇年以降資料入手が可能な最近までである。

とくにこのうちでも、序章の概説は、最近の経済援助の動向・援助効果分析の方法、主要な問題点、将来の方向づけに関するすぐれたサーベイとなっており、注目に値する。これを読めば、少なくとも援助に関する主要論点を把握することが可能であろう。

さらに付録の研究参考資料として、国際援助機関および各国の援助機関の組織機能と活動状況が十二章（アメリカ、米州開発銀行、イギリス、フランス、西ドイツ、カナダ、ベルギー、イタリア、オランダ、デンマーク、ノルウェー、国際開発援助機関の概要および援助機構）にわたり研究されており、本論における五ヵ国の分析とともに、貴重な資料となっているのである。

このように本書は、供与国側・先進国側に立ち、援助の理念・目的、実施状況、その効果、その拡大の方法を各国別・各機関別に考究した貴重かつ精力的な研究であり、資料的にもまた我々の考察の出発点・基礎として、大いに注目されねばならないのである。

しかし援助問題に関するつっ込んだ理念的ないし理論的究明には欠けており、また新しい援助方向を示唆しうるまでにはいたっていない。今後の援助問題研究の際の参考資料として重要であるとともに、我々はこういった地味な研究にもとづいて、新しい展開を求めての一層の考察をたゆまずすすめていかねばならないのである。（アジア経済研究所・アジア経済調査研究双書・第一二七集・A5・五五六頁・一七五〇円）

＊　＊　＊

―深海　博明―

隅谷三喜男著『日本労働運動史』

近年、わが国の労働運動に関する研究は徐々ながら進展を示しつつある。労働運動史研究については、その分野の特殊性から客観的研究と実践的活動の間に一線をひくことが難しく、また社会政策論なり労働経済論なりの社会科学としての体系化の遅れを反映して、これまで学界の共有財産としてその成果が十分蓄積されてきたとは決していえないように思われる。

しかし、著者もいう通り、今日「好むと好まざるとにかかわらず、労働運動を無視しては、現代日本を理解することはできない」のであり、それに対する理論的・歴史的・実証的研究の深化がまたれるところであった。本書は、かかる要請のもとで、明治初期より今日にいたるわが国の労働運動を著者なりの視角をもって通史としてまとめたものである。

著者は、本書をまとめるにあたって四つの留意点をはしがきに示している。そのうち「広く史料にあたること」、つまり実証性をもったものに仕上げることと、「運動史を分析する視角を定め、その視角から運動史を分析する方法をとった」ことが特に著者の力を注いだ点といってよいであろう。事実この点が本書の特徴であり、長所も短所もこの点に関連をもっているように思われる。

著者のいう分析視角とは、「一言でいえば労使関係の視角であり、具体的には、日本資本主義の発展に対応する賃労働の視点」ということである。しかし、著者はこの「賃労働の再生産構造……とかかわらせて、労働運動史を分析」するという視角については「その具体的方法は本書のなかに展開されている」というのみで、詳しい規定は行っていない。この点について、本書の中では、賃労働の創出それから再生産という面を意識からはずれぬよう努力し、それに関連して熟練・不熟練など労働力の質の展開にも目をむけていることはしれる。しかし、そのような賃労働の再生産構造とのかかわり合いということがたえず意識の中にあるとはいいがたく、時代がすすむにつれ、特に戦後についてはそのような視点が著しく稀薄になっている。それ故「賃労働の視角」が一貫して十分に展開され、それが成功しているかどうかについては疑問がのこるであろう。

さらに、本書では賃労働の視角ということから、労働運動を社会（主義）運動一般に解消せぬよう努力し、労働運動を独自的にとりあげ、それを一つの糸で結ぼうとしている。戦前のわが国にあっては労働運動が一般に社会（主義）運動の一分肢として展開されたのを反映して、研究自体も労働運動プロパーを扱うものはほとんどなかった。戦後にいたって、末弘厳太郎氏の労作が世に出たとはいえ、その後そのような方向が進展するまでにはいたらなかった。この点本書にみられる隅谷氏の努力は高く評価してよいであろう。もちろん、社会（主義）運動と不可分離にすすめられてきたわが国労働運動をそれと全く切り離して論じているわけではなく、両者の関連は的確におさえられている。それとかかわることで、わが国の労働運動の特徴の一つが、思想的には急進派と穏健派という形で、また政治活動か経済活動かということでもたえず両極に対立して抗争をくり返してきたことであるとされるが、それをとらえるにも従来よくみられた一方の立場の資料をもっぱら援用するという方法ではなく、「広く史料にあたる」という当初の姿勢を貫かれているように思われる。

ほかに時期区分も従来のものとは必ずしも一致したものではなく、氏の苦労がうかがえるが、個々の点でも従来の通説を否定して「冬の時代」における労働組合の存在を指摘したり、またアナ・ボル論争に新しい見解を示したりもしている。しかし、逆に氏が通説でなかったものとして、明治後期の労働運動と社会主義運動においてメンバーや内容が異なっていたという指摘のごとく、むしろ通説として理解されていたと思える点もあり、また小瑕瑾とはいえ、学術書としては誤字誤植も少いとはいえない。

しかし、いくつかの欠陥にもかかわらず、本書の意義は大きく、戦後世に出た通史としては末弘氏の著書と共にこれから最も広く利用されるものの一つとなるのではないかと思う。本書はそれに応えうるものといってよい

であろう。（有信堂・昭和四一年三月刊・A5・三〇八頁・九〇〇円）

—小松　隆二—

＊　＊　＊

南　亮三郎著

『マルサス評伝

——その生誕二百年の記念に——』

近代人口理論の父といわれるT・R・マルサスが生まれてから本年は二百年にあたるので、日本人口学会がマルサス資料展やマルサスについてのシンポジウムを行い、人口学研究会は論文集「マルサスと現代」を出版した。人口学説の権威である南氏のこの著は、こうした企ての一つとして、また氏の人口学体系のⅣとして出版されたもので、氏の前著「人口原理の確立者——トマス・ロバート・マルサス」（昭和一九年）にもとづきこれを大はばに改訂した、わが国で唯一の本格的なマルサス評伝である。

その内容は、その生涯、その時代、初版人口思想、後版人口思想、経済思想、マルサス論争、マルサスと現代、にわかれる。この書の一つの特徴は、著者が昭和三六年と四十年の二回にわたってマルサスの旧地をめぐり、それにもとづいてマルサスの伝記を詳細に調べたことであろう。その家系から説き起して、ロバートの生地 Rookery, Wotton Parish 教会の両親の墓地、牧師補に就任したといわれる Albury 教会、「人口原理」出版後最初の経済学教授となった Haileybury の East India College の後身 Haileybury College, 遺体が葬られた Bath Abbey, 兄 Sydenham 方の子孫 Wight 島の Robert Malthus 氏などをたずね、マルサスの誕生日を確かめたり、マルサス家保存の文書を調べたり、誠に興味深い。

そしてマルサスの「人口原理」の構造、ゴドウィンとの論争、「経済学原理」などを詳しく紹介し、人口論の独創性、社会主義者その他の反対論、経済学上の寄与、マルサスと低開発国、先進国の人口問題、マルクス主義との対決などにも触れ議論を展開している。そこでは最近の関連した諸研究も多数平易に紹介されていて、マルサスおよび彼に関連した諸問題の全貌を知るにまことに重宝なものであろう。ただ著者自身が、「ほんとうを言えば、私の体系はマルサスのうえに立脚している」（序）といわれるように、全体としてはマルサス擁護で、生誕二百年の記念のためか、マルサスに対する厳しい批判がなく、評伝の面が薄れたのが惜しまれる。社会主義経済学の側からの厳しいマルサス批判を併せ読むべきであろう。（千倉書房・昭和四一年二月刊・A5・本文二五二頁・ほかにマルサスおよびその夫人、長女のカラー写真、序、索引などを含む・一三〇〇円）

—白井　厚—